

トピックス IV

麻しんの発生動向に関する最近の話題

国立感染症研究所感染症疫学センター  
多屋 馨子

世界保健機関（WHO）によると、2012年の世界の麻しん患者報告数は227,245人で、麻しんによる死亡が122,000人と推定されています<sup>1)</sup>。2013年10月～2014年3月までの6か月間で、麻しん患者報告数が1,000人を超えている国が13カ国（7%）あり、麻しん排除を宣言した国を含めて35カ国（18%）では、同期間の患者報告数が100～999人と多くなっています<sup>2)</sup>。

わが国では昨年末から患者数が急増し始めましたが、多くは海外で感染し、帰国後発症した輸入麻しん例で、2014年1～2月には海外から全国各地に麻しんウイルスが持ち込まれました。検出される麻しんウイルスの遺伝子型は、昨年国内で初めて検出されたB3が最も多く、そこにD8やD9が混在しているのが今年の特徴です（図1）。

また、全国の保健所、医療機関、関連機関により、「1人発生したらすぐ対応」、「2回の予防接種率をそれぞれ95%以上に」、「全例の検査診断」が検討され、大規模な流行に至らず、増加のスピードは緩やかになりつつあります（図2）。

報告患者の年齢は、10歳未満（特に0～1歳）と20～30代に多く、約半数がワクチン未接種です（図3）。2回の接種機会があった年齢層（6～23歳）は前後の年齢層に比べると患者報告数は少ないものの、この年齢層でも未接種者が目立ちます。

推定される感染源・感染経路としては、前述した海外が最も多く、フィリピンでの感染が最多となっています。次いで多いのが家族内感染で、ワクチン未接種の患者が報告されると、その兄弟姉妹も全員ワクチン未接種ということが多く報告されます。その他、医療機関受診時に感染を受けた人も多く、医療関係者の発症も複数報告されています。

2013年4月1日に改訂された「麻しんに関する特定感染症予防指針」では、2015年度までに麻しん

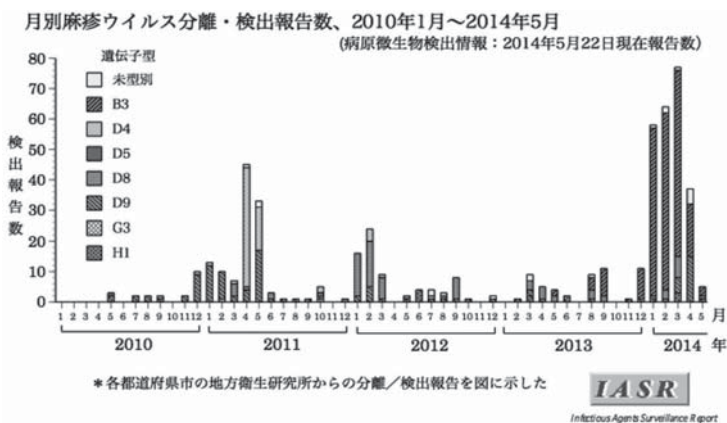


図1 全国の地方衛生研究所で分離・検出された麻しんウイルス（遺伝子）の数と遺伝子型（2010～2014年5月）

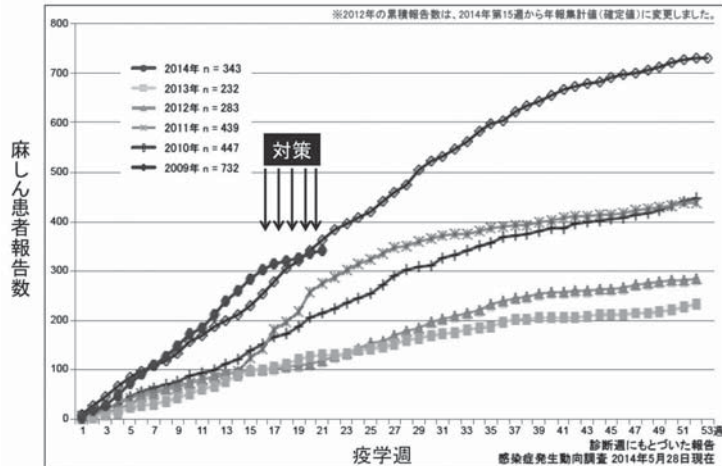


図2 麻疹累積報告数の推移 (2008～2014年第21週)

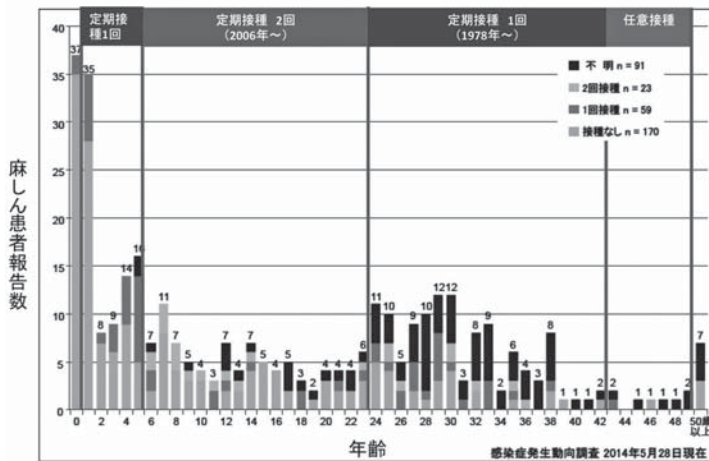


図3 年齢群別予防接種歴別麻疹累積報告数 (2014年第1～21週: n=343)

を排除し、WHOの認定も受けて、その状態を維持することが目標になっています。麻疹輸出国と非難されたわが国も、麻疹輸入国へと移り変わりましたが、輸入されても広がらないように接種率を高めておくことが重要です。

「1人発生したらすぐ対応」により感染拡大を早期に抑えることが重要です。また、各自が1歳以上で2回の予防接種を受けておくこと、それを母子健康手帳等の記録で確認する機会を持つことが大切です。風しん流行の記憶が新しい中、受けるワクチンは麻疹と風しんの両方の予防を考えて、麻疹風しん混合ワクチンの選択が奨められます。

【参考資料】

1. 世界保健機関 (WHO) : Measles. [http://www.who.int/immunization/monitoring\\_surveillance/burden/vpd/surveillance\\_type/active/measles/en](http://www.who.int/immunization/monitoring_surveillance/burden/vpd/surveillance_type/active/measles/en) (2014年6月現在 URL)
2. 世界保健機関 (WHO) : Measles Surveillance Data. [http://www.who.int/immunization/monitoring\\_surveillance/burden/vpd/surveillance\\_type/active/measles\\_monthlydata/en/](http://www.who.int/immunization/monitoring_surveillance/burden/vpd/surveillance_type/active/measles_monthlydata/en/) (2014年6月現在 URL)
3. 国立感染症研究所感染症疫学センター : 麻疹. <http://www.nih.go.jp/niid/ja/diseases/ma/measles.html> (2014年6月現在 URL)